



2015/8/1 No.69

発行者：社会福祉法人 ミッドナイトミッションのぞみ会

本 部：〒293-0023 千葉県富津市川名1436番地

自己刷新と海外研修



常務理事

井本 義孝

このたび釜山巨済島の愛光園を訪問する機会があった。韓国愛光園（知的障害者総合施設）その出会いは一九八一年の国際障害者年にある。当時ニュルンベルクでドイツ福音主義教会主催の「一九八一年だけでなく障害を持つ人と障害を持たない人のためのデイアコニー的イニシアティブ」大会に友人を介して招かれ、出席した。例えば三十四年前のことであり当時千葉県社会福祉事業団に勤務していたが無理を承知で四週間の休暇を取り、家族四人で渡独した。その大会の席上、レセプションがあり二〇名近くの各国代表が交歓する時があった。その時、隣席に居られたのが愛光園総務の崔起龍氏であった。帰国以来、数回にわたり訪韓を促されたが実行する機会を得ぬまま今日に至った。ただ数年後依頼により小職が身元引受人となりお二人に職員の招請状起草し約半年間日本での責任者となった。残念なことに崔総務は金任順常務理事とソウルに家具をトラックで引き取り

に行かれた時、交通事故に遭遇し殉職されたのであった。金先生は車外に放り出されたが九死に一生を得られた。爾後、金先生からは三〇年にわたり、クリスマスカードは言うに及ばず、機関誌も年に数度贈与して下さり今日に至ったのであるが、小職からは碌に返事もせず、積年の不義理の解消も旅行の目的ではあった。

今回分かったことは、愛光園は一九六二年孤児院として発足しており、期せずしてわが法人と「同年のスタート」に奇しき縁を覚えた。当時の韓国における福祉環境は相当に酷しかったに相違なく、港湾都市釜山から約一五〇km「離れた島」（当時は橋がなかった）の山腹にしか場所が与えられなかったことは想像に難くない。爾後幾星霜、金任順先生の双肩に全てがかかり、九〇歳の今日まで運営に盡力されると共に多くの国際的支援組織を育成され、韓国、ドイツ、アメリカ、日本に支部が置かれ支援が続けられた結果、今や港を見下ろす山全体がコロニーとなり障害者の町とでも云うべき一大福祉集団が出現している。

この四十五年近くになる福祉の仕事振り返れば節目毎に海外旅行を経験してきている。理解のある上司やスタッフのお陰であるが、多分にドイツの友人や、キリスト教関係のご縁で機会が与えられていることは誠に感謝にたえない。と言うことは日常の時間・空

間を離れることにより心身がリフレッシュされる感があり、自分にとっては日本を離れることは自分自身を再認識することになり、強く言えば自己刷新に通じると言える。つまり海外旅行の功德は抜群で、今日まで法人の末席を汚すことにも通じ、感謝の外ないのである。どうか多くの方にドイツや韓国等で得難い体験を積まれる様お薦めする次第である。

東京望みの門 自立援助ホーム マナの家

マナの家に勤め



生活指導員 池本 仁美

四月からマナの家で勤め始めました池本です。宜しくお願い致します。

私は、最終学年で養護・虐待ゼミを専攻し、マナの家で実習したことを機に、四月から勤めるようになりました。養護施設・児童自立支援施設、マナの家での実習を通し、子どもは関わる大人、環境次第でどのようににも変わるということ学びました。

実習の時に関わったAさんは、実習の時には会話は一方的で、相手とうまくコミュニケーションが取れていませんでした。しかし、再会したAさんは別人。お腹が痛いと言いつつ寮生を心配してカイロを渡す。一方的に話すのではなく相手の話を聞き、相手に合わせ話



が年長者になったという環境の変化、職員がAさんを理解し、心に寄り添った支援を行い、互いに共感し合うことでAさんの中で何かが変わってきたのだと思います。

昔から母に「語るとは心で聴くこと。相手の理解するということは、自分の普通を崩すことだ」と教えられていました。今までは意味が分からずにいましたが、マナで勤め始め、母の言葉が分かってきたような気がします。気持ちに寄り添い、相手が悲しい時には一緒に悲しみ、嬉しい時には一緒に喜ぶ。どんな言葉よりも、共感し合える人が身近にいることが大切なのだ。虐待などによって生きにくさを抱え、人間不信に陥り、自己肯定感を持つことが出来ない子ども達にこそ、そういった大人が必要なのだと感じました。どんなに技術、経験が優れていても、相手の思いに寄り添ったものでなければ無意味です。分かってもらえている、理解されている感覚が彼女たちには必要であり、それを実感した時に、自分や自分の問題とも向き合って行け

るのではないかと考えます。
未熟な私ですが、利用者と共に笑い、悲しみ、経験を通して、成長していきたいと思えます。

婦人保護施設 望みの門学園

心機一転

栄養士 志保沢 沙也加

四月一日より、紫苑荘から学園へ異動となり、早いもので三ヶ月が過ぎました。望みの門に勤め始めてからの六年間は、楽生園・紫苑荘といった高齢者施設での勤務であった為、利用者の年齢層の若い学園で喜ばれる食事作りができるかと不安な点もありました。

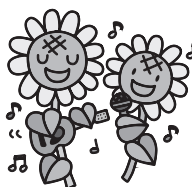
実際に、利用者さんと生活を共にしてみると、食事や関心がとても高いことがわかりました。学園に異動し、なにより嬉しく、印象的であっ



たのは毎食、食事を残さず食べてもらえたこととです。また、食事後は、今日のご飯は美味しかった、次はこんな料理が食べたいといった感想や要望がダイレクトに伝わってくるため、献立を考えていくうえでとても参考になります、また仕事のモチベーションアップにも繋がっています。徐々に利用者さん一人ひとりの好き嫌いや理解できるようになり、野菜の苦手な利用者さんに対し、どのような献立なら抵抗なく食べてもらえるか等も考えながら、献立作成を行っています。

また、今後の一つの課題として、利用者さんの健康管理を今まで以上に重視していく必要を感じました。年齢層が若いということもあり、生活習慣病を予防するということに重点をおき、日々業務にあたっていくきたいと思います。

食事面だけではなく、学園の他職種の職員とも連携をとり、より充実した学園生活を送れるようサポートできたらと考えています。まだまだ、未熟な点も多いですが、今後も喜ばれる食事作りを行っていきけるよう努めていきたいと思っています。



養護老人ホーム 望みの門 楽生園



支援員 町田 佳市

梅雨の季節となり、温度、湿度の変化が著しく熱中症等、体調を崩しやすい、特に体調管理の大切な時期となります。日中は、換気、水分補給を行ない、熱中症、脱水予防に努めています。しかし、利用者の方の日常生活がどれだけ充実し、また楽しく、安心した生活が送れるよう支援できるのか課題であり、日々試行錯誤の毎日です。

今、私が力を入れていることは、クラブ活動・レクリエーション活動です。楽生園では、多種多様なクラブがあります。園芸・塗り絵・手芸・カラオケクラブなどがあります。季節感が感じ取れる様、工夫をして、利用者皆さんが楽しめるように、活動を行っています。

園芸・園の敷地内菜園を行なう事について、農業関係の仕事をやっていた方や家庭菜園を趣味で行っていた方、土をいじる事が好きな方に先頭に立って頂き、園内菜園を行っています。最初は、果物類がいいかと思ひ、利用者の方から意見を聞くと、難しいから出来ないうという意見が多くあった為、簡単ですぐ収穫ができる夏野菜のナス・トマト・大根の三種に挑戦しています。

日々成長する・育てる楽しさを思い出すことや、感じ取って頂けるように支援を行っています。また、収穫したものは、利用者の方々に食せる用に



栄養士との相談により、調理をして頂き提供してもらうように、段取り整え食の楽しさも行っていきます。その時の利用者の方の笑顔がとても印象的です。近年、粘土・土等の指を使った運動が脳の活性・集中力のアップ・認知症予防にも効果的であることが、立証されたことにより、利用者の方々に対して積極的に参加を促して行きます。

今後は、利用者の方の趣味を伺いながら積極的に参加、取り組めるレクリエーション・クラブの活発化、外部の刺激を受けられる様な企画を立案し、利用者の方の笑顔が絶えない施設づくりを目指して取り組んでいきたいと思っています。

★楽生園からのお願い！

楽生園では利用者の余暇の一環として「不要

になりましたDVD（時代劇、映画、カラオケ等）がございましたら、ご寄付の程、宜しくお願ひします。

特別養護老人ホーム 望みの門紫苑荘

十年ぶりの紫苑荘



副施設長 小嶋 友子

今年の四月より、楽生園から紫苑荘に異動となり早三か月が過ぎました。以前紫苑荘に勤務していた時は、介護員として利用者の皆様と関わっていました。これからは、副施設長兼生活相談員として視点を改めて関わっていかうと思っています。

楽生園の利用者の方で、個別に介護保険のサービスを利用されてはいましたが、施設が措置での運営の為、介護保険の事について勉強不足なところがありました。四月に介護保険の報酬改定などがあり、「大変な時に異動になってしまったなあ」と心の中で思うこともありました。

しかし、毎日の業務の中で覚えなくてはいけないことも多く、一日があっという間に過ぎていきます。職員の皆様に支えられとても感謝しています。

紫苑荘の中も十年前と比べ、変わりました。個室の増床によりショートステイのベッ

ト数が増えたことにより、介護者の動線も多くなっています。

利用者の皆様は、だいぶ顔ぶれが変わっておりましたが、以前にお世話させて頂いた利用者様が数名元気でいらしたことが、とても嬉しくほっとした気分になりました。

今年四月の法改正で、要介護三以上の方でないと入所が出来なくなり増々、重介護になっていきます。そのような中でも楽しみの提供は大切だと思っております。残存機能の活用をし、現在の状態を少しでも長く維持出来る事が元気にいられることに繋がります。利用者様とコミュニケーションを取ることで見えてくることもたくさんあります。出来るだけ時間を見つけ、皆さんが笑顔になれるよう支援していきたいと思っております。



特別養護老人ホーム 望みの門富士見の里 目指すべき介護サービスとは

かずさ健康管理室室長 渡邊 章貴

平成二十七年四月一日付けで、望みの門紫苑荘より異動してまいりました。同じ老人介護施設間での異動ですが、前職場との大きな違いが一つあります。それは、「ユニットケア」です。

「ユニットケア」とは、介護施設において自宅に近い環境で、他の入居者様や介護スタッフと共同生活をしながら、入居者様一人ひとりの個性や生活リズムに応じて暮らしていけるように支援する介護手法のことを指します。

特別養護老人ホームなどの介護施設は、常時入居者様を見守りながら必要に応じて介護できる体制をとっています。そのことによって、入居者様に対して三百六十五日・二十四時間体制の安心・安全を実現しています。しかし、その一方で、多くの要介護状態の高齢者を介護するという施設の性格上、多くの人を効率的に介護しようとして、【集団ケア】にならざるを得ない面がありました。

しかし今後は、入居者様の尊厳ある生活を保障していくためには、一人ひとりの個性と生活リズムを尊重した【個別ケア】が求めら

れています。その【個別ケア】を実現する一つの手法が「ユニットケア」なのです。

「ユニットケア」の最大の特徴は、入居者様個人のプライバシーが守られる個室と、他の入居者様や介護スタッフと交流するための居間（共同生活室）があることです。入居者様十人前後を一つの「ユニット」として位置づけ、各ユニットに固定配置された顔なじみの介護スタッフが、入居者様の個性や生活リズムを尊重した暮らしを支援します。

新たに建設される特別養護老人ホームでは、「ユニットケア」を導入する施設が毎年増えてきていますが、まだ施設全体の三割程度でしかないと言われています。しかしユニットケアを導入する介護施設は、これからますます増えていくことが予想されています。そのような時代背景の中で、私は

入居者様の尊厳ある生活を実現するために、一人ひとりの個性を把握しその個性に見合った介護サービスの提供をしていきたいと思っています。



老人デイサービス事業 望みの門デイサービスセンター

介護員になつて



介護員 白石 徹

昨年十一月から望みの門デイサービスにお世話になって、あっという間に八ヶ月が過ぎました。

私が介護に携わる事になったのは、両親の介護が必要になり介護の知識・技術を修得しようとデイサービスに採用して戴きました。介護の知識も無いまま一般企業でしか働いた事がない私には戸惑い、悩む事ばかりでした。最初は諸先輩職員から指導していただく多種多様な仕事内容に驚く毎日でした。

環境に慣れた頃、利用者様から「今日、目がおかしいよ」と言われて、利用者様も自分を見ているんだなと、自分が利用者様に影響を与えることに「笑顔が一番」だと気付きました。

利用者様の「安全第一」に「目配り、気配り、心配り、背を向けない」を心がけ、これからの仕事の糧やスキルアップにしたいと思っています。

デイの職員はコミュニケーションが良く、協力し合って取り組んでいます。

私も諸先輩職員のように余裕を持って利用者様に接せられるように、知識・技術を身に

付けて、来所してくださる利用者様に喜んでいただけるように努力して行きます。利用者様にとってデイが安全で楽しく過ごせる施設となる様に明るい職場作りを目指して行きたいと思います



訪問看護ステーション 望みの門訪問看護ステーション

還暦を迎えて



管理者 渡邊 零子

今年の三月で還暦を迎え退職となりました。引き続き契約社員として勤務しております。還暦ともなりますと色々な器官が低下します。目・皮膚・脳など臓器・代謝……と同じ食事をしていても代謝器官が低下しているため当然体重が増えてきます。運動が大事なことは理解しておりますが、運動する予備能力が足りません。今年は時間の余裕を作り運動に励みたいと考えております。なかなか

時間が取れない現実があります。……

さて六〇歳になる今、人生を振り返りまとも看護師として約四〇年間、いろいろなことがあり、迷い・寄り道をし・回り道をしてきました。そんな中でも、看護を通じて患者さんから学ぶことが多かったことを感謝しております。

特に癌の終末期の患者さんからは、『治療だけに専念するのではなく、一人の人間として見てほしい』と言う事でした。私たちはみんな生まれたときから死の遺伝子を持って生まれてきます。

そして年々年を取り、病気になる、やがて寿命がきて死を迎えます。安らかに蝋燭の炎が消えるように迎える人：最後の最後に痛いと呼び息を引き取った人：「妻の為に病氣と闘う」と抗がん剤を打ちながらボロボロになって、最後は妻の腕の中で息を引き取った人……様々でした。

お釈迦様は「この世は、生老病死の四苦である」と考え修行され「さとり」をひらいたと聞きました。これからの私は、うまく病氣と付き合いつつ年を重ねて、安らかな死を迎えられるよう『今を大事に生きること』と考えております。

今年は知事から看護功労賞を頂きました。後輩を育てるため、今訪問看護の認定看護師の資格を取る為、研修に励んでいる職員がい

ます。それをそばで支えている職員や家族がいます。それぞれの今を大事にしている訪問看護ステーションです。これからも宜しくお願いいたします。

追伸

*今回は私の癒を紹介します。

我が家のペットと花です。



就労継続支援事業 望みの門新生舎 エコクラブを通して 大切に想うこと

職業支援員 小池 定直

新生舎に赴任して早四年。当初から外作業のエコクラブに所属し、十七名の利用者さんと共に日々作業に取り組んでいます。毎日外で作業するお陰で既に真っ黒に日焼けしています。

エコクラブの作業は、野菜・花卉栽培（花苗等）を主軸作業として行い、空き缶や段ボールのリサイクル作業、洗車、環境整備等の作

業に取り組んでいます。

特に花卉栽培では昨年度ハウス一棟を増設し、野菜や花の苗を生産し、夏は日々草や野菜の苗、冬はパンジーやビオラを年間約二万ポット生産し、店頭や味楽園さだもと店を中心に販売しています。

稲作事業は八年目を迎え、今年もコシヒカリを約二haを作付けし、現在は水管理、草刈りに追われる日々で施設長、副施設長が老いた身体？で先頭になって作業に取り組み、その姿に続けとばかり職員・利用者も一丸となつて田んぼ作業に今年も大活躍しています。

野菜栽培では真夏の太陽を背に大粒の汗をかいての野菜の収穫、冬には冷たい水に手を浸しながらほうれん草を洗い、良い作物が育つようにと鼻にツンとくる牛糞を何度も一輪車で運ぶなど、利用者一人ひとりが遅く作業に取り組んでいます。四季折々の作業を見ると松山千春の「大空と大地の中で」という曲が思い浮かびます。

「生きることが辛いとか苦しいだとかいう前に、野に育つ花ならば力の限り生きてやれ。」エコクラブで作業する利用者さんの姿・心はこの一節に現されている様に思えてなりません。

こうした努力の積み重ねにより花や野菜が商品として出来上がり、購入して下さった方から「ここの野菜美味しいよね、この花は長



持ちするのよ」と嬉しい言葉が届くたび、その言葉が利用者の大きな励みとなり更なる作業・就労意欲に繋がっているのだと強く感じています。辛くとも逃げ出さない心、素直に受け入れられる心、そして何より一所懸命に力・愛情を注ぎ込む姿勢こそ社会で生きていく上で一番大切なことではないかと私は思います。

私たちが日々育てている物が一人ひとりの手に届いた時、一人ひとりが笑顔になることを願い、その人の心を豊かにすること、喜びに、今後も大空と大地の中で利用者と共に歩いていきたいと思います。

地域活動支援センター 望みのヨカデイサービスセンター ヨカデイサービス センターに赴任して

管理者 榎本八重子

ヨカデイサービスセンターとはどんなところなのか。位置づけとしては障害者総合支援法に基づく地域生活支援事業のなかの地域活動支援センターⅡ型という障害福祉サービスであり、市町村が主体となって地域の実情や利用者のニーズに応じて柔軟に実施する必須事業のひとつです。

富津市には二ヶ所の地域活動支援センターⅡ型の事業所があります。そこでは、地域において雇用・就労が困難な在宅の障害者の方々に対し創作的活動、機能訓練、社会適応訓練、入浴等のサービスが提供されています。では、ヨカデイサービスを紹介します。

まず一日の活動の始まりはバイタルチェックです。少しでも体調に変化がある場合には世話人さんや看護員さんに連絡をとります。変調がなければ午前中は入浴サービスの提供です。入浴はご自分のできることはご自分でやっていただき不得手なところを職員が支援しています。入浴中に身の上話や若いときの思い出話に花が咲くのもこの時です。

「髪の硬いところは父親似、薄いところは

母親似」等々、笑ったり感動したり私にとってこの時間がとても大切な時間となっています。

午後は曜日によって活動は異なりますが、創作活動や散歩、ラジオ体操、菜の花体操などを中心とした機能

の低下防止の活動に取り組みます。また、月一度の調理実習とおやつ作りも活動のひとつです。

なかでも特に利用者さんが楽しみにしている活動は「外出や行事」です。買い物外出、いちご狩り、外食会、お花見会等季節にあわせて企画しています。日々の暮らしに変化や潤いをもたせ、充実した生活を送るためにも外出や行事も大切なものとなっています。

私が四月に新生舎からヨカデイサービスセンターに赴任して四ヶ月が経ちました。ヨカデイサービスの利用者さんは平均年齢六十五歳。高齢期を迎え若いときとはまた違った生きづらさが出てきているとは思いますが、利用者さんがヨカデイサービスセンターを利用



するなかで一人ひとりが充実した毎日が送れるよう取り組んでいきたいと思ひます。

千葉県中核地域生活支援センター 君津ふくしネット これからの君津ふくしネット

相談支援員 横浜 敬子

君津ふくしネットは設立からもうすぐ十一年を迎えます。

傾聴を始め、障害・子育て・介護・就労・非行・不登校・ひきこもり・DV・虐待・累犯・貧困等の様々な相談を受け、ご本人やご家族や関係機関と共に、「その人らしい生活」を目指して参りました。

二〇〇五年介護保険法改正で制定された地域包括支援センターは、これから迎える超高齢社会を見据え、介護予防ケアプラン作成・権利擁護・総合相談を柱とし、地域の高齢者世帯の包括的支援に奮闘しています。

そしてこの春設置された生活自立支援センターは、個々の支援プランを立て、就労支援・家計相談・生活困窮家庭の子どもの学習支援などを行い、生活保護になる手前のセーフティネットの役割を担ってスタートしました。

地域の課題が変化すると共に福祉制度や体制も少しずつ見直され、ネットワークもかなり強化されてきました。しかし、まだまだ必

要があっても福祉サービスを利用出来ない方々が待機をしておられたり、利用できるサービスがない方もおられます。

これから迎える高齢者介護問題や、高齢者のみならず働き盛りの若者や食

べ盛りの子どもにまで広がる貧困問題。私自身も将来は年金で生活し介護サービスを受ける事ができるだろうか？と不安になる格差社会の現実もあります。

このような社会でこれからの君津ふくしネットの果たすべき役割とはなにか？と自問自答を繰り返していると、「あの時こんな支援があったら今のようない辛い状況にならなかったかもしれない」という相談者の方々の涙を思い出します。

共に経験させて頂いた事を無駄にせず活かして地域にお返し出来るように、ニーズや課題をしっかりキャッチし、必要な情報を迅速に発信して行けるよう気持ちを新たにしたいと思ひます。



「富津市富津地区地域包括支援センター 地域包括支援センターのサマエとこと」

介護支援専門員 平野 千里

暑い日が続く毎日、皆様いかがお過ごしでしょうか。

私は、紫苑荘、在宅サービスセンターに介護支援専門員として勤務し、昨年四月、地域包括支援センターに異動となり居宅介護専門員として、二年目を迎えています。

開設当時、委託を含め、九十件近くの利用者様に御挨拶、契約、サービス内容の把握等、地図を片手に地域包括支援センターの職員で必死に駆け回っていた事を、昨日の事のように思いだされます。地域包括支援センターの介護支援専門員は、要支援の方を担当し、支援を行っていきます。お元気な方が多く、訪問時、「暑いのによく来たね」帰る時は、「また来てね」と声をかけて下さり、利用者様から力を頂いている事に感謝をしています。

他には、病院のソーシャルワーカーから、もうすぐ退院する方の支援の依頼、「今まで普通に家事をこなしていた母が、急に家事が出来なくなり、夜も寝なくなりどうしていいかわからず困っている」、離れて暮らしている子供さんから、「高齢の親が心配だが、どうしたらいいか」等、様々の相談が寄せられ



ます。難しいケースもありますが、利用者様、また御家族の希望を伺い、介護保険の申請代行、次に必要と思われるサービスに繋げ、御本人、御家族に安心して生活して頂けるような援助を行う事も業務の一つです。



介護保険制度は改正される事も多く、一般的に理解されていない制度であると思います。一人でも多くの方に知って頂き包括支援センターの役割である、「多様な課題を抱えた高齢者が、住み慣れた地域で安心してその人らしい生活を継続出来る。」このような支援が行えるよう努めていきたいと思っています。

児童養護施設 望みの門かずさの里

一年の歩み

保育士 山口 洋子

かずさの里に保育士としてお世話になってから、約一年が過ぎようとしています。

私にとって、この一年間の歩みは、これまでの経験と違った、特別な一步一步のように感じています。

三十五名の子どもたちと一緒に過ごす日々は、楽しくも苦しくもありますが、それぞれの子のの一つ一つの成長を見る毎に大きな喜びを感じます。同時に、元氣一杯のパワーを貰っています。振り返れば初めの頃、人見知りや様々な警戒心から、なかなか心を開いてくれない子もいました。

早く信頼関係を築きたいと事あるごとに何度も話しかけましたが、思うような会話まで進まず、声掛けの難しさ大変さを知りました。そんな様子は、年齢が高くなる子につれ、更に難しく悩むこともありました。

親子であれば喧嘩をしても、自然と時が解決してくれましようが、この仕事の厳しさを受け止めました。

自分の経験から、我が子だったら放っておくものの、同じように接すればいつまで経っても信頼関係が築けないだろうし、どのように話しかけたら良いのか、日々私自身の課題でもありました。先輩方にその都度、話を聞いていただいては、自分自身を励ましたりしました。

一方では、「一緒に遊ぼう。」「一緒に寝よう。」と甘え上手の子もいます。ユニットでの夕食時、私が担当だと話すと、

「やったー。」と喜んでくれる子もあり、思わず「ぎゅーっ」と抱きしめたい気持ちになります。ともあれ、一人ひとりの笑顔を見ますと嬉しく思い安堵感を覚えます。

このような日々を送りながら考えることは、どの子も親とのスキンシップが必要な大事な時期であること。一人ひとりを受け止められる環境を整え、年齢に関係なく甘えられるところは甘えさせてあげたいと思います。また、社会自立に向けて、基本的習慣が身に付くよう、胸を張って旅立てるよう、大人の経験をもとに支援していきたいと考えております。そして、新たな家族とは呼べないものの、互いを思いやる家族の心を養い、共に笑い喜び、悲しみも分かち合える明るい生活を求め築きたいと思っています。何よりもまず、私自身の更なるスキルアップを図りたいと思います。



乳児院 望みの門方舟乳児園 子ども達が 「居心地のいい家」を目指して

保育士 川名由里子

私が方舟乳児園に来て、一年と二カ月経ちました。一般的に生れたての赤ちゃんも一人で立ち、歩き始める時期になります。この月日を振り返り、とても早く過ぎていったように感じます。方舟は私にとっての職場ではありますが、子どもたちにとってはここが【家】となります。

施設ですので、支援すべきことは生活すべてにおいてあります。そのなかで職員同士が今日できたことなど多くの発見を共有しアットホームな雰囲気を感じました。毎日毎日子どもたちのそばで成長を見守り、圧倒されながら一日一日の大切さを痛感し、日々過ごしています。

今までも保育士として働いていましたが、健常児保育についてはほとんど経験がなく、わからないことだらけでした。子どもたちのやりとりも不安だらけでした。

自分のふとした何気ない行動や言葉遣いが子供たちにとってどのように伝わるのかを考えさせられ、自分を振り返るよい機会をもたらしたと考えています。

しかし、長年の自分が当たり前と思っていた

たこと、自分自身の癖や習慣などが子供たちにとって良い見本となるよう切り替えることは、なかなか難しいものでした。また乳児園の勤務形態も初めてで、毎日頭も身体もクタクタでした。



しかし、子ども達と過ごす時間が増えるのと次第に人見知りも無くなり、私が受け入れられたと実感できた時は今まで感じていた大変さは一気に吹き飛びました。

先日外部研修に行かさせていただいた。毎日、子どもたちと過ごすことで園内の生活しか見ていませんでしたが、施設を出たことで、乳児園という施設の在り方、私が属している仕事は保育であり福祉であること、子どもたちへの日々の関わりもはっきりとした自分の養育感をもち、人格が形成される時期の子どもたちと関わっていく必要があるのだと感じました。そう気づくと、子どもたちと関わることへの恐怖が生まれました。しかし、それは関わる大人の責任であるのだと思

い受け取っていきたいと思います。

まだ、歩き出したばかりですが、方舟で経験していることを身体だけでなく、今後の自分の成長に繋げていけるよう、また、ここが子ども達にとって居心地の良い、愛されていると感じられる家、そんな施設の一職員として在りたいと思います。

児童家庭支援センター 望みの門ピーターパンの家
ピーターパンの家
またまた引越しました！

管理者 新藤 紀子

一月に駅前の一軒家から現在の旧足立区健康学園に移転して、早くも半年がたちました。当時はいきなり大きな施設の一角に巣食ったので、相談業務という内容は相変わらずなのに、なぜか「児童家庭支援センターは児童福祉施設なのだ！」と再確認したことを覚えています。

この半年のうちに、今後併設となる「児童心理治療施設」の計画も進み、八月末からの工事着工を受けて、再度一軒家の「ピーターパンの家」に戻ることでなりました。

再びここに戻って腰を下ろしてみると、この半年間、自分たちの相談業務はどう育っていたのか？とふと疑問に思いました。子どもは育つ存在です。だからこそ、そこに携わる

ピーターパンの家も職員も日々新しい情報を取り入れ、相談技術をあげていかなければ、変化する子ども事情に対処していくことはできません。

そういう思いでこの半年の相談内容を振り返ってみると、登園や登校を渋っていた子どもが徐々に行けるようになったケースがありました。家族に暴力を振るわなくなった子どももありました。子どもとのふれあい方がなんとなくわかるようになったお父さん、グチグチ言うのではなく子どもの様子をじっと見てあげることでできるようになったお母さんがいました。

では、ピーターパンの家はそういう家庭に対して何をしてきたのでしょうか。

人は不安になる生き物です。不安を感じると安心を求める行動を起こします。子どもたちの場合その多くは、指しゃぶりや傷いじり、年齢が上がるリストカットといわゆる「問題行動」と呼ばれるものと



なります。大人の場合は、イライラガミガミ、夫婦の仲違い、仕事への逃避など、家族全体に影響する行動となります。もともと不安が根底にあったの行動ですから、不安が解消すれば自然に解決するはずですが。

では、どうやって解消させるのでしょうか。答えは一つです。ピーターパンの家が皆の心の拠り所となること。職員が丸となって受け止める役割を担い、それをしっかり実感できた人は皆変化します。中には「自分が変わらなければ」と自分に負荷をかけすぎてたびれきっている人もいます。そういう人にはきちんと「あなたがしっかり頑張るところはここだけ。後はこちらに任せてください」と役割分担をしてあげることです。安心して前へ進める人もいます。

利用者を受け止めること、その為にはきちんと見立てること、支援計画を立てること、そして受け止める技術を磨くことが求められます。

これまで結果をいくらかでも出すことができるようになってきたということは自分たちもいくらか成長してきたということなのではないかと：そうやって自分たち自身も励ましながら日々の業務に勤しんでいます（笑）。



バザー報告

六月六日（土）望みの門バザーを開催いたしました。尊い献金・献品を頂戴しました皆さま、当日ご来場いただきましたお客様、ボランティアの皆さま、またお祈りのうちにバザーをお支え下さったすべての皆さまに心より感謝いたします。なにかとご不便をおかけしたことと思いますが、今後とも望みの門をご支援いただけると幸いです。

望みの門バザー収支報告書

単位：円

収 入	支 出
中古衣料	材料費
雑貨	雑費
ベーカリー	通信費
屋台	本部繰入金
新品	次期繰越
家具	
その他収入	
寄付金	
収入計	支出計
1,814,635	1,814,635

右記のとおり報告いたします。

望みの門支援バザー実行委員会
委員長 田尻 隆

社会福祉法人ミッドナイトミッションのぞみ会 平成26年度 決算報告

貸借対照表

(単位：千円)

事業活動計算書

(単位：千円)

資金収支計算書 (単位：千円)

科 目	金 額
資 産 の 部	
流動資産	549,196
固定資産	2,747,687
(基本財産)	2,072,040
(その他の固定資産)	675,647
資産の部合計	3,296,883
負 債 の 部	
流動負債	97,539
固定負債	695,883
負債の部合計	793,422
純 資 産 の 部	
基本金	723,022
国庫補助金等特別積立金	613,464
その他の積立金	413,651
次期繰越活動増減差額	753,324
純資産の部合計	2,503,461
負債及び純資産の部合計	3,296,883

科 目	金 額
サービス活動収益	1,444,303
サービス活動費用	1,387,103
サービス活動増減差額	57,200
サービス活動外収益	11,333
サービス活動外費用	6,359
サービス活動外増減差額	4,974
経常増減差額	62,174
特別収益	3,243
特別費用	1,719
特別増減差額	1,524
当期活動増減差額	63,698
前期繰越活動増減差額	715,627
当期末繰越活動増減差額	779,324
基本金取崩額	0
その他の積立金取崩額	26,000
次期繰越活動増減差額	753,324

科 目	金 額
事業活動収入	1,449,675
事業活動支出	1,313,528
事業活動資金収支差額	136,147
施設整備等収入	41,776
施設整備等支出	187,665
福祉事業活動収支差額	△ 145,889
その他の活動収入	106,725
その他の活動支出	126,608
その他の活動資金収支差額	△ 19,883
当期資金収支差額	△ 29,625
前期末支払資金残高	556,188
当期末支払資金残高	526,563



※ホームページにも掲載しております。

http://
www.nozominomon.or.jp/

編集後記

日本基督教団は先月の常議員会にて「戦後七十年にあたって平和を求める祈り」を可決しました。この祈りは「私たちは、私たち自身が経済性を優先させる罪に陥り、自分だけが良ければ良いとする思いをもって政治や人権に對して無理解・無関心となつていたことを悔い改めます。私たちに他者の痛みや嘆きを自らのものとして受けとめる心を与えてください。平和の君イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン」で結ばれています。

今、この国の指導者たちは戦争ができる国へ向かい着々とルールを敷いています。国会では参考人全員が違憲という判断を下したのに、危険な安保法制を通過しようと躍起になり、それと並行して、教育の現場ではそのような政府の考えにそった教科書を使わせようという圧力や、また国歌、国旗に敬意を表すようにという圧力が、小・中・高からついに大学にまで及びつつあり、また戦争をする国を経済的に支えるために、派遣という安い労働力を期限なしに使えるような法律を作り、また特定秘密保護法が施行され、マスコミに對してもさまざまに干渉し、徐々にしめつけが始まっています。

挙句の果てに新国立競技場の責任を押し付け合う政治家の下、国を挙げて戦争ができる体制に固められつつある印象を受けます。私たちが無関心でいると、いつの間にかそのベルトコンベアに乗せられていくのでしよう。昨今では隣国との間で友好を深めていくとのニュースはすっかり影を潜め、対立や不安を煽るやりとりばかりが目につきます。

ドイツ人宣教師の祈りと働きによって誕生したのぞみ会が、この時期海外研修を実施する意義は極めて重要であります。改めて平和を問う八月としたいものです。